2022年 11月 マナ通信

今月のマナ通信

◎９月の週日の聖書日課：（コリント人への手紙第２、雅歌、ガラテヤ人への手紙、イザヤ書他）

◎土曜日・日曜日の学び：キリスト者の働き、イスラエル王国の繁栄と衰退

からの感想です。

全てのことは神にあるのです。神によらないものは一つもありません。神こそ全てです。その成り立ち（発生源）は、イエス・キリストの十字架の贖いによるものです。なぜ、神は人間の罪の為に死ななければならなかったのでしょうか。それには、まずその現状を把握しなければなりません。そして、それを打開するにはどうすれば良いのか改善が行われなければなりません。

原因がわかり、改善されれば、それを実行に移さなければなりません。そして、その結論に対して確信をもって生活に取り入れ、習慣化しなければなりません。これらのことをもう少し細かく振り返ってみたいと思います。

まず、人間は罪人であるという認識が必要で、これが現状です。アダムの不従順によって罪に陥(おちい)った人間は、罪の発生源である原罪を持つようになります。この世に罪人でない人間はいません。この罪が神との交わりを断ち切り、神との間に大きな壁が出来たのです。

そこで、この壁を取り除く為に父なる神は、神のワザを発揮されました。それは、ただ一人の御子をこの世に送り出して下さったのです。その動機は何だったのでしょうか!　それは、神の人間に対する憐れみでした。そして、そこには底深い神の愛がありました。神は人間を我が子のように愛して下さったのです。神に選ばれて一人の人間が生まれると云うことは奇跡に近い確率なのです。

それ程、貴重な存在なのです。それ程までに神はあなたを愛して、選んで下さったのです。そして、我々は神に愛される為に生まれたのです。その結果、当然我々も神の愛に応えて神を愛し、敬わなければなりません。神様のほうから近づいて来てくれたのですから。

次ぎに改善ですが、まず、その罪を取り除かなくてなりません。罪は大変しつこく、人間から離れません、死ぬと罪は無くなりますが、人間もこの世から無くなることになります。この矛盾を解決したのが十字架の贖いであり、それが福音です。

この世で御子は我々の罪を全て背負い、苦しみながら、我々の身代わりとして死んで下さったのです。そして、三日目に復活し、我々の前に姿を現されました。ただ神の愛のゆえに神が神の力で全てを行ってくださたのです。

我々はイエス様と一緒に十字架上で死にました。しかし、イエス様が復活される時一緒に復活しました。その時に、神の御霊を戴いてイエス様と一緒によみがえったのです。イエス様を長子とする神の子とされたのです。全てがここで変わったのです。今までは律法に仕え律法を守ることで義とされると云われて来ましたが、律法にはその力は無く、養育係としての役目しかありませんでした。

しかし、今は、律法とは関わりなく、律法と預言者たちの書によって証しされて、神の義が示されました。世界が変わったのです。そこには、人間の働きは何もありません。全て神が行ってくれたのですが、ただ一つ、神が下さる神の義を受け取らねばなりません。このプレゼントをしっかりと、全てを神に委ね、神を愛する信仰によって受け取らねばなりません。

改善はなされました。次ぎに我々はこれを適用しなくてはなりません。神の義をいただいた今、私たちはキリストと一緒です。「キリストと一つになって、キリストのいのちで生きる。それを可能にするのが信仰です。我々は律法によらず、信仰によって生きるのです。」（ガラテヤ２章解説より）

次ぎに、聖化について考えてみたいと思います。それは、聖霊の働きです。神様は我々の状況がわからない方ではありまん。祈りによって神に近づき神様に全てを委(ゆだ)ねるなら、神様は聖霊によって答えて下さいます。これらは全て神の働き、ご計画によるもので、人間の力、知恵は一切入ってません。もし、入っていると云うとしたら、それは、律法の時代に逆戻りしているのです。

キリストによって、信仰によって、今立っている恵みに導き入れられたのです。これからは、聖書を読んで、信仰を強くし、神の導きにあずかりたいと思います。（畑中伸之）

私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば肉の欲望を満たすことは決してありません。御霊の実は愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制、です。このようなものに反対する律法はありません。」（**ガラテヤ5:16、22-23**）

〈みことばを味わおう〉から

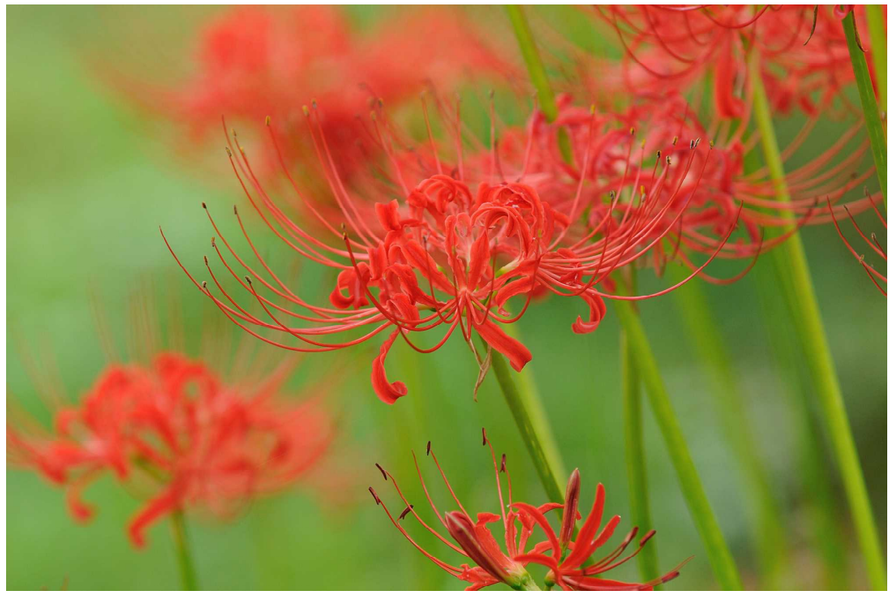
パウロは、「肉の欲望」に支配されないために、御霊に従って歩むようにと勧めます。信仰によって義と認められ、御霊を受けてもなお、私たちのうちには、肉と御霊の性質が同居しています。

私たちは常に、選択を迫られており、御霊によって歩むことを習慣づけなければならないのです。その時こそ私たちは、律法から解放されて自由に生きるようになるのです、とありました。

20－21節に書かれているように、肉のわざは堕落した私の性質です。22－23節では、御霊の実のことが書かれています。

信仰をいただいた私は、いま、集会ごとに御言葉が拓(ひら)かれ、励まされております。そして、主は私の歩幅、歩みに合わせて下さっているかのごとく、平安と喜びを与えて下さっています。

眠りの床にある時も、目覚めている時も主の御名を呼びつつ、祈りつつ、教えられつつ、感謝して日々を送らせていただいております。（福島三弥子）



ガラテヤ書5章7節「・・・よく走っていたのに・・・・真理に従わないようにさせたのですか。」

不真面目でなくよく走っていても、聖霊との交わりから離れてしまうと、この世の欲望の虜になってしまうのです。

もう30年も前になりますが、よく走っていた人が、神様はいないと言い出して、家族で熱心に礼拝に出席していましたが、教会からすっかり離れてしまいました。狐につままれたように感じるほど、信じられないことでした。

律法の下で、外側を整えただけで、聖霊との交わりに生かされていないと、肉の思いにからめとられてしまうのですね。

信仰は恵みなのだと、努力でも、まして修行でもないのだと、おぼろげながら理解できるようになりま

した。献金を沢山するとか、奉仕をするとかではなく、ただ全てを主に委ねることを、主は望んでおられるということ、日々聖霊によって新しくされて行くことでしか、持続できないと心から思わされています。

イザヤ６章９節　『聞き続けよ。だが悟るな。見続けよ。だが知るな。』不思議な御言葉だと、理解できませんでした。余計な解釈をせずにひたすら神の預言を語れ！と言うことなのでしょうか。預言者として召されたイザヤの使命の重大さが偲ばれます。

人知の及ばない事に踏み込まず、神のなさることにお任せするということでしょうか。ガラテヤ書イザヤ書共に救いは一方的な恵みだということを、味わいました。（広瀬裕子）

しかし、人は律法を行うことによってではなく、ただイエス・キリストを信じることによって義と認められると知って、私たちもキリスト・イエスを信じました。律法を行うことによってではなく、キリストを信じることによって義と認められるためです。というのは、肉なる者はだれも、律法を行うことによっては義と認められないからです。」（**ガラテヤ2:16**）

「ただ信じれば救われる」という一見簡単なことが、生まれながらの人間にはできません。自分のことを自分で決めたい、コントロールしたい、という自我があるからだと思います。

私は、自我を明け渡して主を中心にお迎えすることが「盲目的に信じる」「自己を滅する」という面があるように感じてしまった時がありました。それは人間であることを否定するような気がしました。　しかし主に祈り頂いた答えは、救いに関してまず自我を捨てるということでした。神との平和を頂くために、自分にできることは何もない。自我を捨てて主の救いの御業を受け入れること。それが全ての土台です。

自分が我慢して努力して勝ち取った信仰の状態によって救われるわけではありません。主が用いられた兄弟姉妹の伝導と祈りによって今の私があります。感謝します。少しでも正しい聖書理解ができるように学ばせて頂きたいと思います。（永井亮子）

イエス・キリストは私たちの罪すべてを負って、十字架につかれました。それは私たちの罪を赦すためでした。それだけでなく、人の罪ゆえに、神を怒らせ、人との関係が遮断されてしまっているのを解決するためのなだめの供え物でもあったのです。（ロイド・ジョンズ兄は神との和解を強調しているように思えます）。

今、私は罪赦され、神と和解が成立し、交わりを回復していただいています。そして、神との平和の中にあって、交わりつつ、助けられ、助けられ、助けられる日々を過ごしています。

今後も神との平和の中を過ごせるようにするには、Ⅰヨハネ1:1―2:2に戻るようにとのことですが、その聖書個所について、福島兄が丁寧な説明文を加えてくださいましたので、理解が進みました。

その文章の中に次のようなことが書いてありました。「『とりなしてくださる方』とは、『助けが必要としているときに、そばに来てくれる人』のことです」と。

この頃の私は、忘れやすくなり、しょっちゅう「また忘れてしまいました。思い出させてください」とか、「またやってしまいました。なんでしたでしょう？」とか、文字通り、その都度助けられています（レベルが低くてすみません）。

この助けがなくては日々が立ち行かなくなってしまいそうですから、神との平和を持続できるように、特にⅠヨハネ1:7―2:2の中を歩んでゆこうと思っています。（高橋美枝）

兄弟たち、私はあなたがたに明らかにしておきたいのです。私が宣べ伝えた福音は、人間によるものではありません。私はそれを人間から受けたのではなく、また教えられたのでもありません。ただイエス・キリストの啓示によって受けたのです。」（**ガラテヤ1:11-12**）

パウロが伝えた福音は、人間によるものではない（**11節**）と主張するのは、それが人間から出たものであったとしたら、結局、人間の知恵によって救いを得られることになってしまいます。

パウロは教会を迫害する途上で、天からの光と声により、パウロのうちに神の御子が啓示されました。それは、神の選びと召しであったこと、キリストを知ることさえ、パウロ自身の選択ではなく、神のみわざでありました。パウロの神の福音は、一方的な神の恵みによってもたらされたものです。

パウロの人生に転機の時が訪れ、その具体的な出来事は「使徒の働き9章」に記載されています。

旅を続けてダマスコの近くまで来た時、突然、天からの光が輝き、彼を包みました。彼は地に倒れました。その時、「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか」という声を聞きました。　そこで、パウロが、「主よ、あなたはどなたですか」と尋ねると、その声は、「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。立ち上がって、町に入りなさい。そうすれば、あなたがしなければならないことが告げられる」と答えがありました。すばらし聖書の部分です。

私たちは神様のことをよく存じていないのに、神様は私たちのことをすべて見通しておられます。

福音を伝えるにも、様々な工夫が必要かもしれませんが、人間の都合によって、福音そのものが変えられてしまう危険性に注意しなければなりません。福音には人を変える力があるのも、それが神様から出たものである限りにおいてであるからです。

人間は浅いつもりでも深いのが欲望で、弱いつもりでも強いのが自我です。私を愛し、私のために、ご自分をお与えくださった主に感謝します。（木村邦夫）

労し苦しみ、たびたび眠らずに過ごし、飢え渇き、しばしば食べ物もなく、寒さの中に裸でいたこともありました。……もし、誇る必要があるなら、私は自分の弱さのことを誇ります。」（**Ⅱコリント11:27,30**）

私の苦しみ等は、パウロが直面した苦難、苦悩に比べれば、本当に取るに足りないものです。その上、パウロは、苦難に耐えたことを誇らずに、むしろ自分の弱さのことを誇っているのです。『わたしの恵みはあなたに十分である。わたしの力は弱さのうちに完全に現れるからである』と、主が語られます。主イエスに信頼して、素直に従う者でありたいです。（外處トミ）

艱難は　我に御国を　求めさせ
忍耐力を　養い育てる

2022年9月30日

群馬県高碕市岩平の里山の風景

神は過ぎ去った時代には、すべての国々の人が、それぞれの道を行くままにしておかれたが、それでも、ご自分のことをあかししないでおられたわけではない。すなわち、あなたがたのために天から雨を降らせ、実りの季節を与え、食物と喜びとで、あなたがたの心を満たすなど、いろいろのめぐみをお与えになっているのである。」（使徒14:16-17）

私たちは神様のお姿を見ることは出来ませんが、それでもなお神様は私たちの日々の生活を支え、心を支え、私たちに神様の存在をお示しになってくださいます。今日も神様の恵みに感謝します。（外處光歩）

最後に兄弟たち、喜びなさい。完全になりなさい。慰めを受けなさい。思いを一つにしなさい。平和を保ちなさい。そうすれば、愛と平和の神はあなたがたとともにいてくださいます。」

（Ⅱコリント13:11）

日々の生活の中で、神様の愛と恵みと御守りをいただいていることを感謝します。これからも主に導いていただきながら、主により頼んで歩んでいけたら幸いです。（外處結実）

しかし私は、神に生きるために、律法によって律法に死にました。私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。今私が生きているいのちは、私を愛し、私のためにご自分を与えてくださった、神の御子に対する信仰によるのです。」（ガラテヤ2:19-20）

私の救いにおいて、私は何一つしておりません。私を救って下さったのは、全て神様の御心ゆえに主イエス様が十字架の上で尊い贖いの血潮によって成し遂げてくださり、律法に叶う生き方が出来るいのちもお与え下さり、救いの完成へと導き続けて下さっています。

愚かな私の何かによるところの無い神様のご計画による救いの御業であり、主イエス様を救い主として信じることのできる信仰をも与えていただき、私は自分の救いについて何の心配する必要が無いことを教えていただきました。何という恵みの選びでしょう。

生まれる前から神様のご計画の内に入れていただいていたことをロイド・ジョンズの通読を通じて、その真理を改めて深く教えていただきました。その明確な教理のゆえに上記のみことばも実際となって示され、キリストの御霊によって、少しづつですが変えられてゆく自分に感謝を覚えます。（外處徳昭）

しかし私は、神に生きるために、律法によって律法に死にました。私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。今私が肉において生きているいのちは、私を愛し、私のためにご自分を与えてくださった、神の御子に対する信仰によるのです。」（ガラテヤ2:19-20）

律法を破れば、その刑罰は死です。罪人として、私はすでに律法を破ってしまいました。それゆえ、律法は私に死刑の宣告を下したのです。しかし、キリストは、私の代わりに死なれることによって、律法を破った報いを、私のために受けて下さいました。

したがって、キリストが死なれた時、私は死んだのです。キリストは、律法の義なる要求をことごとく満たされたという意味において、律法に対して死なれました。それゆえ、私も、キリストにあって、すでに「律法に死んで」いるのです。

私たちはすでに律法に対して死んでいます。もはや律法とは何の関係もありません。それは、信者が好きなだけ十戒を破ってもよいという意味でしょうか。そうではありません。私たちはきよい生活を送ります。それは律法を恐れているからではなく、自分のために死んで下さったお方を愛しているからです。

律法の下にいることを望むキリスト者は、律法が自分をその呪(のろ)いの下に置くことを悟らないからです。そのうえ、律法の一つの点を守ろうとした途端、その人には律法の全体を守る責任が生じるのです。

「神に生きる道」は、律法に死ぬ以外にありません。律法によって、きよい生活が生じることは決してありません。神が意図されたのは、決してそのようなことではありませんでした。きよさのための神の方法は、20節に説明されています。

私たちは、キリストの死において、「キリストと」同一であるとみなされます。キリストがカルバリで十字架につけられたばかりか、私も、キリストにあって、そこで「十字架につけられた」のです。神が私を罪人とみなされることは、もはやなくなりました。

もはや私は、自分自身の努力によって救いを得ようとする者ではなくなりました。もはや私は、律法のさばきの下にある者でも、新しく生まれる前の自分でもなくなりました。以前の邪悪な「私」は十字架につけられました。古い「私」が私の日常生活に何かを要求する権利は全くありません。これが、神の御前における私の立場です。それゆえ、私も、それにふさわしく振る舞うべきなのです。

私たちは、人格を持つ者として、また個人として生きることをやめるのではありません。しかし、すでに死んだ者と神がご覧になる人は、生きているのと同じ人ではありません。「もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられる」のです。

救い主が私のために死んで下さったのは、自分が選んだ生活を私が送り続けるためではありません。主が私のために死なれたのは、主が私たちのうちで生きてくださるためです。

「今私が」このからだをもって「生きているのは……神の御子に対する信仰によるのです」。信仰は、信用、信頼、または依存という意味です。キリスト者が生きるのは、キリストに頼り続けることに、キリストに従うことに、自分のうちに、キリストに生きていただくことによるのです。

このように、私たちの生活を導くものは、キリストであって、律法ではありません。努力すること、励むことではなく、信じること、信頼することです。

私たちはきよい生活を送りますが、それは、刑罰を恐れるからではなく、「私を愛し、私のためにご自分を与えてくださった神の御子」を愛しているからです。

何と幸いな信仰の人生でしょうか。ただ神の恵みに感謝する次第です。（福島勲）

貴重な感想ありがとうございました。

次回はマナ10月号の感想を11月10日迄に福島兄弟へお寄せ下さい。（畑中）　（5-6頁修正版）